

群衆から集合的知性へ

曾 我 千亜紀

From Crowd to Collective Intelligence

SOGA Chiaki

Abstract

In this paper, we aim to approach the following question: does the people's behavior in cyberspace remain as instinctive as it does in the crowd? First, we will consider the difference between the crowd and the natural condition as described by Hobbes. Then, against this, we will develop the example of mutual help that citizens are spontaneously capable of in disaster situations and also Tarde's concept of "public". Finally, since both Hobbes and Tarde seem to miss a dimension when thinking about the crowd, we try to demonstrate how "informational entity" could help us formulate a more willing and hence positive conception of collective intelligence. This will enable the creation of a design for a form of a new cooperative that utilizes the characteristics of cyberspace.

Keywords : crowd, collective intelligence, cyberspace, public

キーワード : 群衆, 集合的知性, サイバースペース, 公衆

1. はじめに

デジタル技術が発達し、端末さえあれば、自由にネットに接続できるようになった今、この新たな空間の未来はしばしば議論の俎上に載せられる。その中でも重要なテーマの一つがサイバースペースにおける集合としての人々の振舞いである。ネット黎明期とは異なる

平成 26 年 12 月 9 日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科准教授

り¹⁾、現在ではむしろ、悲観的な見方がされることが多い。例えば、議論それ自体が成立しない Twitter 上でのやり取り、ある発言に対して次々と過剰な反応が投げつけられる炎上、罵詈雑言が飛び交う掲示板の書き込み……こういったものを目にする人々は、サイバースペースにおける集合体について楽観的な希望など持ちえないと断じたくなるにちがいない。その一方で、インターネットの利点を挙げる人々は、有用性や利便性の側面のみを強調して、ネット空間独自の特性を活かした新たな可能性について模索することをやめてしまう。わかりやすく可視化された利点の方が人々に受け入れられやすいからである。

本論ではサイバースペースにおける集合体の未来について、これまでとは異なるポジティブな可能性を描きうるのかどうかについて考察していく。人間が集団として振舞うとき、個人とは異なる性質が見出される。これを否定的に捉えるのか、それともそこに積極的な可能性を見出す余地はあるのか、検討してみたい。そして、この検討を踏まえたうえで、インターネット普及以前の枠組みの中では生み出されえなかった新たな希望、すなわち集合的知性を形作る可能性を提起することを試みる。

2. 群衆とはいかなる存在か

2-1. 群衆についての一般的理解

私たちが一般的に群衆²⁾という言葉によって抱くイメージは次のようなものであろう。曰く、群衆は盲目的であって愚かな行動を取ったり熱狂的な反応をしてしまったりする。曰く、群衆の中では個は埋没してしまい、全体としてひと塊の存在となってしまう。そのひと塊としての存在は、往々にして個のような理性や知性を持ち合わせることができない。このようなイメージは、たとえばル・ボンの『群衆心理』という著作の中に見ることができる。

ある一定の状況において、かつこのような状況においてのみ、人間の集団は、それを構成する各個人の性質とは非常に異なる新たな性質を具える。すなわち、意識的な個性が消えうせて、あらゆる個人の感情や観念が、同一の方向に向けられ

1) 初期のインターネット・コミュニティではいわゆる直接民主制が実現されるという期待があった。大学人やエリートなど一部の層のみがアクセス可能であった状態を当然のものとして、近い将来自由で平等な「開かれた空間」が実現されるのではないかという楽観的な展望が語られていた。

2) 今は「群集」と表記されることが多いようだが、本論では *foule* に対し「群衆」という訳語を当てることとする。

るのである。一つの集団精神が生れるのである³⁾。

しかも、ここで生じるとされる集団精神は、個よりも劣り、たとえ個がより良い方向へ導こうとしたところで、それを阻んでしまう圧倒的な力や勢いを持つかのように思われる。現実の社会においても、何らかの組織が個人の抵抗にも関わらず愚かな行動をしてしまう姿を、私たちは何度も見ている。

およそ文明というもののうちには、確定した法則や、規律や、本能的状態から理性的状態への移行や、将来に対する先見の明や、高度の教養などが含まれている。これらは、自身の野蛮状態のままに放任されている群衆には、全く及びもつかない条件である⁴⁾。

このように、19世紀末にル・ボンが言う、本能を脱することのないものとして群衆を理解する態度は、今日の私たちが抱いている素朴な群衆イメージにも直接結びつく。群衆というタームによって私たちが一般的に受ける印象は、無秩序や混乱、あるいは止めようのない狂気といったものであり、ネガティブであることが多い。サイバースペース上の集合体の振舞いを群衆と同一視し、ポジティブな可能性を見出せないと人々が考えてしまうのは、まさにこの理由に拠るのであろう。そのような人々にとって、サイバースペース上の集合体は、〈集合知〉となるよりもむしろ、炎上やサイバースペースを引き起こす存在として見なされるからである。

ところで、上述の引用でル・ボンが述べている「野蛮状態のままに放任されている群衆」という言葉は、あたかも社会契約説によって社会秩序の根拠を説明しようとした人々が想定する自然状態 *natural condition* かのようである。しかも、社会化される以前の状態にある種の理想を託したルソー⁵⁾ではなく、むしろホッブズのそれを思い起こさせる。法的

3) ル・ボン『群衆心理』講談社学術文庫、p. 26 (Le Bon, *Psychologie des foules*, PUF, p. 17) からの引用。同様に以下の引用も参照のこと。「集団的精神のなかに入りこめば、人々の知能、従って彼等の個性は消えうせる。異質的なものが同質的なもののなかに埋没してしまう。そして、無意識的の性質が支配的になるのである」(同書、p. 32 (*Ibid.*, p. 19))。

4) ル・ボン、同書、p. 19 (*Ibid.*, p. 13)。以下の引用も参考にせよ。「人間は群衆の一員となるという事実だけで、文明の段階を幾つもくだってしまうのである。それは、孤立していたときには、恐らく教養のある人であったろうが、群衆に加わると、本能的な人間、従って野蛮人と化してしまうのだ」ル・ボン、同書、p. 35 (*Ibid.*, p. 21)。

5) ルソーの自然状態を理解するためには注意が必要である。なぜなら、1755年の『人間不平等起源論』と1762年の『社会契約論』とでは、自然状態（および社会）についての彼の主張が全く逆のように見えるからである。詳しくは市野川容孝『社会』岩波書店を参照のこと。

な秩序にも権威にも縛られない状態の人間の振舞いをホッブズはどのように考えていたの
であろうか。

2-2. ホッブズの自然状態とサイバースペース

ホッブズは、「万人の万人に対する闘争」war of every man against every man⁶⁾、「万人
は万人に対して敵である」every man is enemy to every man⁷⁾というよく知られた言葉か
らもうかがえるように、自然状態に置かれた人間は必ず闘争状態へと到ると主張する。こ
の状態は、実際に歴史の過程で生じた状況というわけではなく、強力な権威による支配
体制がなければ、人々は互いに殺し合うことになってしまうという思考実験である。これ
によって社会のシステムを根拠づけようとしたわけである。

ホッブズによれば、闘争状態は人間の本性が必然的に引き起こすものである。その本性
として、競争 competition, 不信 diffidence, 誇り（もしくは名声）glory の三つが挙げら
れている⁸⁾。それは以下のようにまとめられるであろう。競争とはつまり、他の人々より
も利益を欲し、そのためには侵入することも厭わないということの意味する。だからこそ
不信が生まれ、人々は安全を求める。敵が攻めてくる危険に怯えるからである。それと同
時に、人々は名声や評判をも求める。他者によって評価され承認されたいという欲求が人
間にはある。

『リヴァイアサン』第一部において、ホッブズが極めて精緻に「人間」についての分析
をしている点は興味深い。自然状態の想定から思考実験を始める前に、デカルトの『情念
論』にも似た仕方で、ホッブズは詳細に人間の本性について議論している。これはホッブ
ズにとって必要なプロセスであった。なぜなら、闘争状態に陥ってしまう理由と、そこか
ら脱するための理性的思考を裏付けるためには、「人間とは、このような本性を持ち、こ
のような反応をし、このような思考をする存在である」という、いわば普遍的な理解が必
要だったからである⁹⁾。

ホッブズの自然状態と人間観を踏まえて私たちが立てようとするのは、次の問いである。
サイバースペースはホッブズの言うような自然状態、そして、そこから生ずる闘争状態に
重ね合わされるようなものでしかないのだろうか。すなわち、互いが互いを敵視して、常
に身を守ることを考えねばならず、他者との友好的な関係を結ぶよりもむしろ真っ先に攻

6) ホッブズ『リヴァイアサン（一）』岩波文庫, p. 210 (Hobbes, *Leviathan*, p. 77)

7) ホッブズ, 同書, p. 211 (*Ibid.*, p. 78)

8) ホッブズ, 同書, p. 210 (*Ibid.*, p. 77)

9) ポスト・〈ポストモダン〉において果たしてどれほどの意味を持つかについては後に検討する。

撃を仕掛けるような状態を前提としなければならないのだろうか。あるいは、サイバースペース上の混乱はホップズの自然状態とは異なるものであって、人間の本性として一括りにされてしまう理解を超え出る力を持ちながら、私たちは他の方法を模索している最中なのであるだろうか。

サイバースペースにおける法整備やルールの必要性などが主張されるとき、実際に暴力的な言説やコミュニケーションがまかり通っているという現実が念頭に置かれる。ヘイトスピーチや名誉毀損といった問題が浮上するのはこのためである。ホップズのような仕方ではコモンウェルスを追求するのは一つの可能性であり、プラグマティックな解決の方法であろう。だが、それにもかかわらず、私たちは別の可能性を探究してみたいのである。もし、ホップズの自然状態とサイバースペースを同列に論ずるとすれば、私たちはホップズの結論を受け入れねばならなくなる。すなわち、混乱状態にある狼たちを律するためには強い権威が必要であって、私たちは或る意味で、絶対的な権力 --- リヴァイアサンによって統制されるべきであるという結論である。そのような統制がないかぎり、正当な社会的関係を築くことなどできないというわけである。しかし私たちに、強い社会的統制とは別の仕方では、サイバースペースにおける集合体を形成する可能性は残されていないのだろうか。

2-3. 災害時に現れるユートピア

ところで、混乱した状態、あるいは災害時だからこそ現れるユートピアがある。レベッカ・ソルニットによれば、災害に見舞われた地域において、奇跡的な連繋と或る種の幸福感を覆う例がしばしば見られる。彼女の著作『災害ユートピア』では、さまざまな事例が報告されている。突然襲いかかった不幸の中で、人々は連帯する。公的機関よりも早く現状に即した形で社会的な絆が築かれる。誰もが利他的となり、状況に応じた行動を取ることができる。人々は何をおいても誰かを救いたいと願うし、何かの役に立ちたいと感じている。

例えば、1906年のサンフランシスコ大地震や2005年のハリケーン・カトリーナといったケースでは、無償で食糧を提供したり、避難の手助けをしたりといった一般市民による自発的な活動が見られた¹⁰⁾。ソルニットの挙げる事例は興味深い。なぜなら、私たちの中

10) ソルニット『災害ユートピア』亜紀書房 (Solnit, *A Paradise Built in hell*, Penguin Books) を参照のこと。本書では全体に渡って様々な事例が報告されている。一般市民による絆というプラスの側面と同時に、警察や役所といった公的機関が柔軟な対応をなしえないマイナスの側面も指摘されている。

にはパニックにおける人々の愚かな行動や浅はかな振舞いが刻み込まれているからだ。それはメディアが拡散するイメージとしての衆愚である。それは同時に、ホップズの闘争状態とも重なる。だがソルニットは次のように言う。

災害を研究してわかるのは、人間の本质は確かに一種類ではなく偶発的だが、少なくとも災害時に現れるそれは、有能で、気前が良く、立ち直りが早く、他人に共感でき、勇敢だ。セラピーの分野では、災害の帰結として例外なくトラウマが語られる。それは、耐えがたいほどもろい人間性や、自らは行動せず、誰かが何かしてくれるのを待つといった、典型的な被災者像を暗示している。災害映画やマスコミも、災害に遭遇した一般市民を、ヒステリックで卑劣な姿に描き続けている。こういった情報源は、わたしたちに、自身の経験よりも、彼らが描き出す姿のほうを信じろと言っているかのようだ¹¹⁾。

地獄の中でこそ存在しうるささやかなユートピアは人間にとって希望の光である。私たちは幸福感すら覚え、そのようなユートピアの終焉を嘆きさえするのである。

このユートピアにはさまざまな要因が考えられるだろう。長期的な展望や期待を優先しないのは、今ここで起こっている問題を解決しなければそもそも生き延びることができないからである。その意味で、普段は社会的身分や地位によって分断されていた人びとが繋がりをうる。余りにも大きな災害の前では、富裕層と貧困層といった違いも、社会的身分や人種の差も小さなものとなるか、あるいは考慮に値しない要素となる¹²⁾。

私たちもまた、3・11の事例を知っている。人々がいかに冷静に行動し、互いに助け合ったか¹³⁾。私たちは人間の可能性というものを信じたくなる。だが、残念なことにこのユートピアは長続きしない。たとえ、潜在的に生き続け、復活を遂げることはあるにしても、である。立ち向かうべき災害という共通の目的が人々を連繋させる。もしも、極限状態や混乱状態を脱したならば --- それ自体は誠に幸いなことであるが --- 共通の目的は見失われるわけである。その途端、共同体もまた解体されてしまうか、あるいは存続の危機に晒されてしまう。

11) ソルニット、同書、pp. 19-20 (Solnit, p. 8)

12) ソルニット、同書、p. 48 (*Ibid.*, p. 28)

13) ここでは論ずる暇がないが、現地に向かったボランティアの活躍とともに、SNSによる連絡や呼びかけといったインターネットの活用もまた強調しておくべきだろう。

2-4. ル・ボンによる群衆 *foule*

ソルニットの描く災害の中での一般市民の振舞いは、愚かで個が埋没しているル・ボンの群衆とは正反対のように見える。また、ホップズの描く人間像ともかけ離れているように思われる。しかしながらル・ボンは、群衆もまた「熱狂的な行動や英雄的な行動に出る」¹⁴⁾ ことがあると指摘している。すなわち、個人は個人としての意志や思考を見失うが、だからといって必ずしも犯罪的行為に走るとは限らないというわけである。むしろ、熱狂的な行動がヒロイックな方向へと突き動かされることもある。そうだとすれば、ソルニットの災害ユートピアはル・ボンの群衆の域を出るものではなくなってしまふ。

もし、災害時の連帯が一時的な熱狂にすぎないのであれば、映画の中で描かれる衆愚も災害の中での連帯も同じ事象の裏表となるだろう。もし熱狂のみに突き動かされるのであれば、サイバースペース上の炎上も連帯もまた、同じ事象の裏表となるだろう。結果からすれば両者は反対である。しかし、等しく逆境に置かれ、そこから脱しなければ長期的未来を描くことなどできない状態は、人々が繋がることを容易にし、英雄的な行為へと誘う。おそらくは身体的な情念に突き動かされることによってである。状況が人々を強制して連帯へと向かわせる。

ソルニットが注目する災害におけるユートピアは、ホップズの間人像に収まらない人々が実現するものである。彼らは利他的で、慈悲深く、互いに敵となるわけではない。しかしながら、彼らの行為は情動的であるように見えてしまう。このような連帯は日常的に生じてよいはずであるが、ある特殊な状況下においてのみ、このようなユートピアが現れるのであれば、それは理性的で意志的というよりもむしろ、ある種の興奮状態が生み出す一時的なものとなってしまふ。

だが私たちは、そうではない連帯を考えるべきなのである。熱狂のみに駆動されるのではない集合体の実現を目指さなければならない。ここで、ル・ボンの同時代人であり、批判者でもあったガブリエル・タルドの議論を参照してみたい。タルドの公衆 *public* という概念はいったいどのようなものなのであろうか。

3. タルドの公衆 *public*

3-1. 群衆 *foule* と公衆 *public*

ル・ボンの著作にも言及しているガブリエル・タルドは、ル・ボンとは違った集団を考えるために、群衆ではなく公衆という概念を提起する。

14) ル・ボン、前掲書、p. 35 (Le Bon, *op.cit.*, p. 21)

ここでいう公衆とは、まったくちがった意味に解された公衆 --- すなわち純粹に精神的な集合体で、肉体的には分離し心理的にだけ結合している個人たちの散乱分布である¹⁵⁾。

ホップズやソルニットの描く人々が、生存を賭けたり、生身の身体を伴った連繋を実現したりするのに対し、タルドが定義する公衆は、精神によって繋がっている。タルドに従えば、身体性は重要ではない。

こうみてくると、群衆というのはいくらか動物的なものである。群衆は、本質的には肉体の接触からうまれた心理的伝染の束なのではないだろうか？ しかし精神から精神への、また魂から魂へのあらゆるコミュニケーションは、かならずしも肉体の接近を必要条件としない。われらの文明社会に世論の流れ *courants d'opinion* があらわれるにつれ、肉体的接触という条件はしだいに重要でなくなる¹⁶⁾。

このイメージはまさに、今のサイバースペースを思い起こさせるものである。現実の身体的な近接とは違った仕方の人々が集うのである。ここで私たちは以下のように整理してみたいと思う。すなわち、群衆は身体的であり、公衆は精神的である。このように仮に定義してみよう。タルドに従えば、インターネットは公衆と相性が良いはずである。顔の見えない人々がメディアを介して連繋する。しかも、タルドの時代とは異なり、新聞のような共通のメディアの前提すらなく、個々人が各自の趣味嗜好に合わせた情報収集やコミュニケーションをしている。サイバースペースという空間における個々のグループは、それぞれ小さな共同体に過ぎないかもしれないが、連繋の絆を作り出すには向いているかのようと思われる。ところが実際には、そこでの群衆的振舞いが目立つ。タルド自身も、公衆から熱狂が生じ、群衆となりうる可能性について述べている。

公衆を潜在的な群衆とも定義できよう。しかし公衆の群衆への転落は、このうえ

15) タルド、『世論と群衆』, p. 12 (Tarde, *L'opinion et la foule*, PUF, p. 9)。訳書では *foule* は群衆となっているが、本論では *foule* は統一して群衆という訳語を当てることとした。ただし、訳書のタイトルは原文のままとした。

16) タルド、同書, p. 12 (*Ibid.*, p. 9)。翻訳では群衆となっているが、ここでは群衆と変更した。原語はル・ボンと同様、*foule* である。

なく危険なことだが、ほとんどおこらない¹⁷⁾。

だが実際はそうではない。私たちがしばしば目にするのは、冒頭でも述べたように、公衆が容易に群衆と化してしまう姿である。タルドの公衆という概念は、たしかに興味深い¹⁸⁾。おそらく、彼の言うような連繋はサイバースペースにおける絆を考察するのに役立つだろう。だが、群衆へと墮すことのない共同体はいかにして可能かを、タルドは充分に論じない。例えばタルドは、精神と身体それぞれの特性と役割をデカルトのように丁寧に位置づけることはない。問題は精神と身体の関係であり、均衡なのではないか。一方が過剰になってしまうことが問題なのである。

実際のところ、愚かな群衆も、災害時の連繋も、サイバースペースもすべて、精神と身体の均衡の崩れた状態と見ることができる。結果が善となろうと悪となろうと、精神と身体の違いと合一を見事に成し得ないことの結果である。精神が暴走しても身体が暴走しても、炎上したり熱狂が生じたりしてしまう。私たちはそうではない絆の形成方法を考えるべきである。

3-2. 公衆を創り出す --- 集合的知性

要するに、熱狂や崇拜、信仰ではなく、身体を見事に統御し、理性的に意志の力によって敢えて知性的集合体を形成できるかどうかが鍵となる。レヴィの言う集合的知性とはそのようなものであると解釈してみよう。

もちろん、サイバースペース上のコミュニティすべてにこのような集合体たれと命ずるわけではない。だが、一つの模範として、あるいは一つの可能性として、いつでもどこでもリアルタイムで、空間的制約を超えたところで、知性的集合体が構築されるのであれば、それは私たちにとって大きな救いとなる。それは災害の中で実現されたようなユートピアを、災害という極限状況ではなくとも敢えて創り出そうとする試みである。

目標は災害に立ち向かうといったように、外部から誰に対しても平等なものとして到来するものではない。個々の集団がそれぞれ創り上げ、共有するものである。そしてその目

17) タルド、同書、p. 23 (*Ibid.*, p. 14)

18) 「公衆」概念についての詳細かつ明晰な分析は、伊藤守の論文「タルドのコミュニケーション論再考」（伊藤守『情動の権力』せりか書房所収）においてなされている。伊藤によれば、タルドの「公衆」概念についての相反する二つの見解、すなわち肯定的な理解と群衆に擬える否定的な理解が生じるのは、モナドや模倣についての考察が欠けていることに起因する。伊藤はこれらの考察を踏まえたうえで、タルドが「私」と「公」の重なりあう領域の生成をすでに洞察していたと評価する。ここでは詳細に論ずる暇がないが、今後、集合的知性と関連も視野に入れ、引き続き検討していくべき課題であろう。

標に従って、集団はメンバーや形やあり方を変化させるであろう。

このあり方はサイバースペースの特性を活かしたものである。時空間を超えてメンバーが繋がりうるサイバースペース上のコミュニティでは、リアルタイムで目標を設定し直し、判断の価値基準そのものもまた議論しうるからである。ピエール・レヴィが言うように「サイバースペースのはじまりによって、集合的知性とその多様性における人間の価値評価を中心とした、経済的かつ社会的な組織のもろもろの形態を検討することが出来るようになっていく」¹⁹⁾ のである。私たちは集合体の中から自発的に、基準や形態そのものすら再考の対象としながら、新たな集合体を空間と時間にとらわれることなく形成する動きを生み出すことができる。

4. ポスト・〈ポストモダン〉の中の〈人間〉概念と情報体

ここで、2-2（特に注9）で提起のみしておいた問いを再び取り上げよう。現代において、改めて〈人間〉概念を論ずることは果たして可能だろうか。そしてそれは、どれほどの意味を持つだろうか。

たしかに、デカルト的二元論やコギトを基盤とした思惟するもの *res cogitans* としての人間を云々することはもはや時代遅れであるとも、あるいはデカルト哲学などすでに乗り越えられたとも言われる。だが、デカルト的二元論を受け止めきれなかった結果が現代なのではないか。「大きな物語の終焉」という「物語」に人々がすがるのであれば、結局は代替物として別の権威を吟味せずには立てていることとなろう。

デカルト的二元論は、精神と身体の区別と合一とを両立させるところに意味がある²⁰⁾。精神は精神の秩序を、身体は身体の秩序に属している。しかしながら、両者は合一もしているのである。人間にとっては矛盾としか思われえない区別と合一が両立する場面が、実のところ、新しい集合体の形成に関わってくるのである。重要なのは、デカルト的な人間の理解、あるいは精神と身体を理解を、個々の人間から、複層的に、人間と対象、人間と人間、個と全体といった関係へと広げていける点である。このような関係性のイメージは、サイバースペースにおけるネットワークの別の理解を可能とするだろう。

一言で表現するならば、サイバースペースにおける精神と身体の区別と合一、意味と物

19) レヴィ『ポストメディア人類学に向けて』水声社、p. 80 (Pierre Lévy, *L'intelligence collective*, La Découverte, pp. 59-60)。サイバースペース上で実際の人間の能力を見つけ出し、活用し、新たな可能性を考え出すプロジェクトについては、レヴィがオティエと共同で著した *Les arbres de connaissances*, La Découverte を参照のこと。

20) 拙論『情報体の哲学』を参照のこと。

理的支持体の区別と合一，そしてまた，個と集合体の区別と合一を両立させることが私たちの喫緊の課題なのである。それはどちらの過剰や暴走も許さないという一種の道徳である。これを道徳として語ろうとするならば，贈与や社会的連繋や絆といった側面を前面に出す必要があるだろう²¹⁾。もしこれを或る種のわかりやすい利点として語ろうとするならば次のようになる。過剰や暴走を押しとどめることによって，個としての私たちも救われ，承認の対象となり，個々の能力が活かされる。

身体であっても精神であっても，どちらかが過剰であっては，集合的知性を創り出すことはかなわない。情動的な善意に突き動かされる場合，あるいは逆に動物的な憎悪に駆り立てられる場合，あるいは身体性を顧みない崇高な理想を推し進める場合，いずれも身体的側面か，精神的側面に偏った行動となる。勿論，結果が善いものとなれば偏りがあるだろうと情動的であろうと構わないという考え方もありうるだろう。だが，いつでもどこでも状況に左右されず意識的に社会的連繋を作り出さうということは，私たち人間にとって大きな強みとなるはずである。

5. おわりに

集合的知性の実現は容易ではない。私たちは普通，サイバースペースでコミュニケーションをする際に，上述のような事柄を常に意識しているわけではないからである。しかも私たちは情動や情念によって動かされ，熱狂や興奮状態が引き起こされることもしばしばある。しかし，サイバースペースは，単なる自然状態でもないし，闘争状態でもない。そこでの人々の振舞いは，ホップズの理解する人間像のみに還元されるわけではない。また，サイバースペースにアクセスする人々は，単なる群衆でもない。たしかに，熱狂に突き動かされる人々や，精神が過剰となった表現，あるいは身体が暴走するコミュニケーションは目立ちやすい。なぜなら，サイバースペースでは沈黙の表現をうまく掬い上げることが困難だからである。だが，人間のコミュニケーションはそれだけには留まらない。群衆から集合的知性へ。集合的知性は，一つの模範や理想にすぎないかもしれないが，それでもやはり，単なる群衆に収まらない集合の可能性を私たちは追求することができるだろう。

21) 拙論「贈与としてのコミュニケーション」『大阪産業大学人間環境論集 13』を参照のこと。

参考文献

- Hobbes, T., *Leviathan*, Printed for Andrew Crookek at the Green Dragon in St. Pauls Churchyard, 1651 (トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』(一)～(四)水田洋訳, 岩波文庫, 1992年)
- Le Bon, G., *Psychologie des foules*, 1895, Nouvelle édition, PUF, 1963 (ギユスターヴ・ル・ボン『群衆心理』櫻井成夫訳, 講談社学術文庫, 1993年)
- Authier, M. et Lévy, P. *Les arbres de connaissances*, La Découverte, 1998.
- Lévy, P., *L'intelligence collective*, La Découverte, 1994 (ピエール・レヴィ『ポストメディア人類学に向けて—集合的知性』米山優, 清水高志, 曾我千亜紀, 井上寛雄訳, 水声社, 2015年)
- Moscovici, S., *L'âge des foules*, Librairie Arthème Fayard, 1981 (セルジュ・モスコヴィッシ『群衆の時代』古田幸男訳, 法政大学出版局, 1984年)
- Solnit, R., *A Paradise Built in Hell*, Penguin Books, 2009 (レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』高月園子訳, 垂紀書房, 2010年)
- Tarde, G., *L'opinion et la foule*, PUF, 1901 (ガブリエル・タルド『世論と群衆』[新装版] 稲葉三千男訳, 未来社, 2006年)
- 市野川容孝『社会』岩波書店, 2006年
- 伊藤守『情動の権力』せりか書房, 2013年
- 曾我千亜紀『情報体の哲学：二元論再考の視点からみたサイバースペースにおける知の創造』博士論文, 名古屋大学, 2012年
- 曾我千亜紀「贈与としてのコミュニケーション」『大阪産業大学人間環境論集13』2014年
- 米山優『情報学の展開』, 昭和堂, 2011年